

熱中症

熱中症とは、様々な要因で体温が異常に上昇し、多くの臓器に障害を来す状態をいいます。この中には熱射病や日射病が含まれます。医学的には、熱痙攣(heat cramps)、熱疲労(heat exhaustion)、熱射病(heat stroke)と更に細かく分類されているようですが、獣医学の分野では明確にされていません。

発生要因

人の場合、暑熱環境下では発汗による体温調節を行いますが、動物の場合は汗腺による体温調節はわずかで、主にパンティングと呼ばれる浅くて速い呼吸による体温調節が行われます。発症は、暑熱環境下(屋外、トリミング時、駐車中の車中など)に長時間いた場合がほとんどですが、さほど暑くない環境下でも肥満の動物、生まれつき呼吸状態が悪い短頭種(パグ、狆、シーズーなど)、そして心臓病や気管支炎などに罹患している場合は熱中症を発症する可能性がありますので注意が必要です。炎天下での激しい運動も要注意です。最近、鳥やハムスターの熱中症も多くなっています。日当たりがよい窓際で飼育している場合は要注意です。特に、エアコンをかける部屋の窓際では、エアコンをつけている時と消したときの温度差が大きいため、より発症しやすいようです。

症状

哺乳動物では体温が43℃になると臓器不全が生じてきます。高体温によって、細胞の蛋白、酵素、細胞膜などが熱変性によって壊死してくるからです。体温がどの程度上昇しているかによって、症状は、軽度なものから命に関わる重症例まで様々です。一般的には、体温上昇、呼吸速拍、過流涎(よだれが大量に出ること)、脱水、頻脈などですが、重症例では、不整脈、呼吸不全、吐血、タール便、昏睡、ショック状態にまで進行します。

治療方法

とにかく体温を下げることです。軽度な場合は、涼しい環境に移し、水を与えることで改善します。ただし、動きもなく意識も低下している様な重症例は、急速に体温を下げ、それぞれの症状に対する対症療法を開始しなくてはなりません。来院まで時間がかかる場合は、冷水を体にかけて体温を下げてもらうのがいいと思いますが、DIC(血液凝固障害)や多臓器障害を併発している場合もありますので、できれば迅速に病院へ連れてきて下さい。治療法も状態により様々ですし、体温低下後に後遺症が残る場合もあります。

動物は全身が被毛で覆われています。その分、寒さには強いのですが、暑さには弱いのが当然です。また、名古屋の夏は特別ですので、他の地区より、より注意が必要でしょうね。